



幻遊伝(神遊情人/Tripping)

2006(平成18)年8月21日鑑賞(角川ヘラルド試写室)

監督・脚本=陳以文^{チェンイーウェン} / 出演=田中麗奈^{タナカリナ} / 陳柏霖^{チェンボーリン} / 李立群^{リーリーケン} / 洪天祥^{ホンティエンション} / 大杉漣^{ダイサイ} / 太保^{タイバウ} / 苗子傑^{ミョウチキエ} / 北村豊晴^{キタムネハルヒ}
 / 特別出演=午馬^{ウマ} / 屈中恆^{クチュウヘン} (角川ヘラルド映画配給 / 2006年日本、台湾合作映画 / 102分)

……台北生まれで流暢な中国語をあやつる(?) 田中麗奈が、あるハプニングによって遠い昔の台湾にタイムスリップ……。互いに1人2役で共演するのは、台湾のイケメン俳優、陳柏霖。そして『幻遊伝』というタイトルにふさわしくそこに登場するのは懐かしいキョンシー……。何ともバカみtainな物語だが、時空を越えた『幻遊伝』ならば、これで良しとしよう……。それにしても、日台交流はいいものの、果たして中国は今後どのように介入してくるの……？

近年のアジア映画の流れと中国語圏

張藝謀^{チャンイーモウ}監督の『HERO (英雄)』(02年)以降、中国・香港・日本などアジアの才能を結集した作品が登場し始めた。それが、陳凱歌^{チェンカイコー}監督の『PROMISE』(05年)であり、アンドリュー・ラウ監督の『DAISY』(06年)など。

『キネマ旬報』7月上旬号はこんな現象が続いている現状に注目し、「アジアで合作映画が作られる理由」を特集した。この問題意識のポイントは、中国・香港・日本・韓国・台湾の才能を結集するとともに、「中国語圏」というものを明確に意識した映画づくりというもの。これは私流に解釈すれば、大日本帝国が「大東亜共栄圏」を唱えて、「アジアの盟主」になろうとしたように、政治的・経済的・軍事的に東アジアの覇権を狙おうとしている中国が、文化的にもその覇者となることを目指していることかも……？

🎬 日台交流映画への出演の損得は……？

それはともかく、キネマ旬報がそこで取り上げた、今後公開される作品には『ウインターソング』『墨攻』『中天』『夜の上海』『呉清源』などとともにこの『幻遊伝』があった。『幻遊伝』は、東アジアの才能を結集するというほど大げさなものではないが、中国語を達者にしゃべる(?) 田中麗奈を台湾のイケメン俳優、陳柏霖チェン・ボーリンと共演させた日台交流の映画。田中は本作の好演により『暗いところで待ち合わせ』で再び陳柏霖とコンビを組むことが決定されたそうだが、中国ではなく台湾で実績を積むことが彼女にとって真にプラスかどうかはかなり微妙……？ だって、『君よ憤怒の河を渉れ』(76年)に出演した高倉健と中野良子は中国で大人気の俳優となったが、中台問題がますます厳しくなっている昨今、田中麗奈が中国本土から「台湾派」と色メガネでみられてしまうと、かえって損……？

もともと、この『幻遊伝』のタイムスリップしてからのシーンはほぼ中国大陸で撮影されているうえ、田中麗奈は2005年春には日中合作連続TVドラマ『美顔』に主演しているから、中国本土でも好感度をキープ……？

🎬 久しぶりに「キョンシー」と再会……？

中田秀夫監督の『リング』(98年)や清水崇監督の『呪怨』(02年)等のジャパニーズ・ホラーが急に大ブームとなり、ハリウッドにまで飛び火したことはご存知のとおり。また韓国では『ボイス』(02年)、『4人の食卓』(03年)、『筆箭』(03年)、『コックリさん』(04年)などの韓流ホラーが次々と……。ところが台湾には『ダブル・ビジョン』(02年)、『シネマルーム5』384頁参照)というホラー映画があるが、中国・香港には基本的にはホラー映画は存在しないよう……？

そう思ったら、中国にもあったあった。それはハリウッド映画のゾンビを中華風にした(?)、ちょっと愛嬌のある怪物キョンシーで、その代表作は『靈幻道士』(85年)。プレスシートによれば、この『幻遊伝』の企画の立ち上げは、日本の製作会社であるオメガ・プロジェクトがアジアとの合作でキョンシー物の娯楽映画を復活させたいというアイデアから始まったとのこと。これによって私達も久しぶりにキョンシーと再会できることに……。

昔の台湾へタイムスリップ

台北生まれの小 蝶シャオディエ（田中麗奈）は父親（大杉漣）が経営する漢方薬品店「大和漢薬舗」の一人娘だが、今どきの若者らしく、遊ぶのが大好き。また「日本に帰りたい」という望みを父親が全然聞き入れてくれないため、欲求不満の様子。

そんな小 蝶シャオディエが仲間たちと遊びに出かけ、夜遅く人っ気のない映画村の中へ入り、かくれんぼをしていたところ、そこでハプニングが……。すなわち、ある部屋を開けたところ、突然こうもりが飛び出して来たかと思うと、上から落ちてきた看板が小 蝶シャオディエの頭に当たったが、これによって突然小 蝶シャオディエは遠い昔の台湾に一人タイムスリップしてしまうことに……。もっとも、プレスシートによれば、この撮影のほとんどは上海のすぐ南にある松江のオープンセットとのこと……。

登場人物たちは……？

突然人通りの多い昔の町にタイムスリップした小 蝶シャオディエが、それを映画撮影の世界だと勘違いしたのは仕方ないところ。しかし、ここで話がややこしいことになったのは、小 蝶シャオディエが金持ちだけを襲うことで有名な女義賊の青靨子チンディーズ（田中麗奈）によく似ていたこと……。この映画に登場してくる面白い人物は、いかにも台湾らしいキャラ（？）の「キョンシー帰し」をしている百鶴道士リー・リー・チュン（李立群）。また、もう1組の面白い人物が、役人が横領した金を盗んだ罪で投獄されているハイションチェン・ポーリン（陳柏霖）とアーゴウホン・テイエンシヤン（洪天祥）。彼らは、洪水で飢饉になった故郷の村を救うために盗賊をしているらしい……。何とか脱獄に成功したこの2人が百鶴道士と出会い、小 蝶シャオディエも仕方なく彼らに同行することになったが、ここから起こるさまざまな奇想天外な台湾風の冒険物語（？）が1つの見モノ……。

もう1つの見モノは恋物語だが……

田中麗奈が主演し、台湾のイケメン俳優、陳柏霖チェン・ポーリンが共演するのだから、こんな美男美女の間に恋物語が生まれないワケがない。したがって、キョンシーが出たり、霊符を貼ったりと日本人にはワケのわからない冒険物語とは別に、この2人の恋模様も進んでいくが、それはあくまで淡いもの……。つまり、それはあくまでストーリー展開上のちょっとした味付け程度……。ところで、さすがに田中麗奈はどんなファッ

ションでも決まっているが、私の見る限り、陳柏霖^{チェン・ポーリン}はあまり時代劇向きの顔ではなさそう……？ 『藍色夏恋』(02年)や『五月の恋』(04年)では、私も現代風のハンサムないい男だと思ったが、逆に時代劇の『花都大戦 ツインズ・エフェクトII』(04年)では、あまりその魅力が発揮できていないと感じたのと同じ。時代劇が難しいのは日本の若手俳優も同じだが、さて今年12月公開予定の『武士の一分』におけるキムタクこと木村拓哉はどうだろうか……？

🎬 父娘の対話の成立は……？

小 蝶^{シャオディエ}がどうやってタイムスリップした昔の台湾から今の時代に戻ったのかは映画を観てのお楽しみとして、この映画では、タイムスリップ前には全く成立していなかった父娘間の対話が、タイムスリップから戻った後に成立しているところが面白い……？ こうなったのは、私の見立てでは、娘がいなくなったことによってそれまでの娘への対応を反省した父親の歩み寄りが30%、娘が成長した部分が70%と見たが、どうだろうか……？ この父娘の対話の成立によって、小 蝶^{シャオディエ}にとって「日本に帰る」とはどういう意味を持っていたのか、そして「日本に帰りたい」という小 蝶^{シャオディエ}の願が叶うのかどうか説き明かされる(?)が、それについても父と娘の対話という観点から考えてみよう。

🎬 田中麗奈の青醜子に期待！

本作では田中麗奈が小 蝶^{シャオディエ}と青醜子^{チンディーズ}の2役を演じたが、ホントは青醜子^{チンディーズ}はほんの少ししか登場しないし、顔を隠したシーンが多いから女義賊青醜子^{チンディーズ}というキャラの魅力はほとんど発揮できていない。私は『LOVERS (十面埋伏)』(04年)の章子怡^{チャン・ツイイー}はそれほど好きではないが、それでも『SAYURI』(05年)の章子怡^{チャン・ツイイー}よりは魅力的……？ 田中麗奈が日本の枠を越えて中国語圏で活躍することに私は大賛成だし、本格的な中国の時代劇にも出演してほしいと願っている。その意味で、陳以文^{チェン・イーウェン}監督が田中麗奈を起用して青醜子^{チンディーズ}を主役にする続編を早くも構想しているらしいから、是非それに期待したいものだ。

2006(平成18)年8月23日記